⑹ 昆虫類 ⑬ バッタ目

バッタ目昆虫は日本には20科442種が生息し、埼玉県からはこれまでに16科129種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種や迷入種などを除いた126種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約36%にあたる45種をレッドリスト掲載種とした。

なお、日本におけるバッタ目昆虫は、日本直翅類学会編（2006）バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑で19科445種32亜種が掲載されたが、その後に出版された日本直翅類学会編（2016）日本産直翅類標準図鑑では、近年の系統解析の結果を反映させた各科の関係性と各種・亜種の扱いなどが再検討された結果､20科441種32亜種とされた。この際再検討されたバッタ科フキバッタ類ではタンザワフキバッタがメスアカフキバッタのシノニムとされている。しかしながら埼玉県内に生息している両種のあいだでは、外部形態に明確に差異が見られその変化は連続していない。そのため両種の扱いにはなお再考の余地があるものと考えられることから本書では従来の考えに従ってこの2種を別種として扱い、日本に生息する種数を日本産直翅類標準図鑑（2016）の441種に1種を加えた計442種とした。

これまでのバッタ目昆虫の掲載種数の変遷をみると、初版の9種、改訂版の25種、前版の31種、そして今回の45種と、絶滅を危惧すべき状況にあるバッタ目昆虫類は大幅に増加した。また前版から継続して掲載種とした31種のうち、レッドランクが下がった種は無く、ランク上昇が9種、DDからNTなどのランク変更は11種、変更なしが11種であった。

掲載種数増加とランク見直しの要因として、県内及び周辺各県の分布状況の解明が進んだこと、及び都市化を含めた自然環境の変化が考えられる。バッタ目昆虫類の生息環境は、ほとんど植生の見られない裸地環境から各種草本類による草地環境、樹冠部や林縁・林床を含めた樹林環境まで多岐にわたっているが、何れの環境でも様々な人為的影響により継続した生息が困難になっている地点が多く見られる。

裸地環境で特筆すべきは河川沿いに形成されていた砂礫地の減少である。これはダム主体の河川管理に伴う河川流量の低下と流路の固定化によるものであろう。砂礫地には、その特有の環境に特化した種群が生息しているが、多くの地点で植生の繁茂による砂礫地消失といった圧迫要因が見られた。特に掲載種であるエゾエンマコオロギやカワラバッタでは顕著であった。

草地環境は元来不安定な環境であり、むしろ人為的に維持されてきた側面が大きい。そのため人間活動や生活習慣の変化の影響を受けやすく、これには都市化による草地環境自体の消失に加えて管理放棄による荒廃や植生遷移による樹林化なども含まれる。特に近年ではオオブタクサやアレチウリなどの外来種による植生の置換が見られ、これまで維持されてきたススキやオギ主体の高茎草地が消失している状況が目立つ。その様な草地に生息している種は、カヤキリ、マツムシ、ナキイナゴ、イナゴモドキ、セグロイナゴなどの掲載種が多くを占める。更に、これまで安定していると思われていた山地帯から亜高山帯における草地では、ニホンジカの採食による影響が顕著になってきた。そのため今回新たにミヤマヒメギスとタカネヒナバッタを掲載種とした。

樹林環境は比較的安定しており、そこに生息する種類も本来であれば大きな変化は生じないが、開発による樹林環境自体の消失による影響は大きく、これは特に大宮台地から台地・丘陵帯にかけての低標高地で変化が目立った。これらの地域では既に近隣との交流不能な残存緑地であったところが多く、一度姿を消した種について他所からの再供給は難しい。また、樹林の規模縮小による生息種の多様性が減少することにも注意が必要となる。外来種による影響としては、中国原産とされているアオマツムシによるものが考えられる。本種が県下に定着して久しいが、現状では都市近郊の街路樹から低山帯にかけての樹林地で安定した生息が見られるに至っている。それに伴い在来種との競合が懸念され、今回は掲載に至らなかったクダマキモドキ類やクサヒバリなどの樹上生息種の生息状況にも留意しなければならない。

前述した高標高地でのニホンジカによる採食影響は、樹林環境でも顕著であり、特に中間層や下層植生の消失が目立った。これらの影響が懸念されるヒラタクチキウマ、クチキウマ、メスアカフキバッタを今回新たに掲載種とした。

本県は内陸に位置し直接海には接してはいないため海浜性の種類は産しないが、県内の河川流域には河口から連なる下流部特有の環境が形成されている。生息種のなかでイズササキリは本県が北限に位置し、カスミササキリは南限に当たる。両種の分布域は県下で重なっており混棲が見られるが、両種の混棲地はいまのところ埼玉県以外に知られていない。また、オオクサキリは、前版で生息環境が安定していると判断されレッドリストから除外されたが、今回、生息地及び生息個体数の減少により再び掲載種となった。

その他の新規掲載種は、秩父市橋立鍾乳洞が国内唯一の生息地であり模式産地でもあるクロイシカワカマドウマ、国内の分布域から隔離された分布状況であるヤマヤブキリ、暖地性の種であり近年生息が確認されたヒサゴクサキリ、山地樹林性で生息密度の低いと思われるムサシセモンササキリモドキとムツセモンササキリモドキ、丘陵から低山地に分布の中心があるササキリモドキとヒメツユムシ、タンザワフキバッタである。

これまで県内中央から東部にかけて分布の空白であったヒナバッタや各地で激減していたハネナガイナゴなどでは回復及び増加傾向がみられるが、生息状況の推移をなお注視するものとし掲載を継続した。

なお今回リストに挙げた45種のうち、クツワムシやヒガシキリギリスなどの著名な「鳴く虫」については、近年確認が途切れていた市街地周辺で記録されており人為的な持ち込みが懸念される。生息環境の保全に加えこのような行為による遺伝的撹乱にも注意を払う必要がある。

［付記］次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、日本直翅類学会編（2016）日本産直翅類標準図鑑を参照した。

科　名　カマドウマ科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **クロイシカワカマドウマ**

〔学　名〕 *Paratachycines saitamaensis* Sugimoto et Ichikawa

指定状況　－

【形　　態】 体長は 9 ～ 12mm。体黒色で斑紋は無い。後脚腿節下面にとげはなく、他のとげも退化傾向を示す。前脚脛説端下面中央にとげはない。オス交尾器の擬腹板は明瞭。

【国内分布】 本州 （埼玉県のみ）

【主な生息環境】 森林内の洞窟内からのみ生息が知られている。夏季に成虫が得られているが、生態などは不明な点が多い。洞外の林床などには生息していないため、極めて局地的な遺存個体群であると推察される。

【県内での生息状況】 秩父市の橋立鍾乳洞が知られている国内唯一の生息地である。1995 年に当地で行われた調査時に得られた個体をもとに、2003 年に新種として記載された。当地が本種の模式産地となっている。1999 年以降の確実な記録は無い。

【特記事項】 橋立鍾乳洞は武甲山体を形成する石灰岩帯に成立した鍾乳洞である。古くから寺社に管理され、1936 年には埼玉県指定天然記念物とされた。そのため一般に開放されてはいるが、洞内の環境は一定に保たれ、動物等の採集行為も禁止されている。当地ではマダラカマドウマ、カマドウマ、ヒメキマダラウマなどと混棲している。優先種は大型のマダラカマドウマであり、本種の個体数は多くはない。洞窟内での餌資源や生態系、生息条件などは解明されておらず、少しの環境変化で容易に絶滅する危険性がある。阿坐穴（毛呂山町）や河又洞（旧名栗村，現飯能市）など県内 12 ヶ所の洞窟から洞窟性カマドウマ類としてホラズミウマなど 5 種が記録されている（山崎，1978）が、この時点では本種の存在は知られていない。本種を含むカマドウマ類幼虫の識別は困難であるため、本種が含まれていた可能性も考えられる。記録されている 5 種のうち 2 種はその後のカマドウマ科の再検討などに伴い、ホラズミウマはカマドウマへ、キマダラカマドウマはヒメキマダラウマへと扱いが変更されたが、これらの種は橋立鍾乳洞との共通種である。本種記載以降、橋立以外の生息調査は十分になされていない。

科　名　キリギリス科

埼玉県(2018)　CR　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オオクサキリ**

〔学　名〕 *Ruspolia interrupta* (Walker)

指定状況　－

【形　　態】 翅端までの体長はオス 38 ～ 50mm、メス 47 ～ 53mm。オス発音器は幅広く、メス産卵器が長い。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 海岸河口付近のチガヤやススキがまばらに生えた砂地や、広い湿原のヨシ原、山地の高茎草地といった、一見異なる環境に生息する。

【県内での生息状況】 現状で安定した生息地と判断されるのは、渡良瀬遊水地の一部に属する加須市柏戸のヨシ・オギ原のみである。当地では 1995 年に生息が確認され、2015 年にも生息を確認することができた。他に、深谷市中瀬の利根川河川敷から記録があるが、2009 年に 1 頭採集、2010 年に 1 頭の鳴き声が確認されたのみでそれ以降の生息が確認できず、定着には至らなかったものと思われる。

【特記事項】 前版では生息環境が安定していると判断されレッドリストから除外したが、安定した生息地は県内で 1 ヶ所のみであり、かつ個体数が少なく絶滅の恐れが高いものと判断されるため、再び掲載種としたものである。

科　名　コオロギ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **エゾエンマコオロギ**

〔学　名〕 *Teleogryllus yezoemma kawara* (Ohmachi et Matsuura)

指定状況　－

【形　態】 体長は雌雄とも 33mm 内外（本州亜種）。体色は黒褐色で、頭部の淡色眉紋はごく小さい。

【国内分布】 北海道、本州　それぞれ亜種に分けられ、県産は本州亜種。南限は和歌山県紀ノ川。

【主な生息環境】 本州亜種は河川中流域の礫環境に限って生息し、各地で分布域は局所的である。礫間や砂地に穴を掘り潜んでいることが多い。裸地環境によく適応した生態を持っている。

【県内での生息状況】 県内では荒川、利根川の中流域に生息している。これまで知られていた荒川流域の熊谷市周辺と利根川流域の本庄市周辺に加え、秩父盆地内と利根川水系の神流川流域でも生息が確認された。入間川や赤平川などの荒川支流では生息地は見出されていない。
何れの生息地でも礫環境そのものの減少が顕著である。これは主に遷移進行による草本類の繁茂やツル植物の被覆によるが、遠因として、上流部でのダム供用開始に伴う河川流量の減少と、流路の安定化が考えられる。荒川水系では二瀬ダムが 1961 年、浦山ダムが 1999 年、滝沢ダムが 2011 年に供用を開始し、利根川水系神流川では下久保ダムが 1968 年に開始した。これらの河川の下流域への影響が顕在化している実例といえよう。
また、被覆する植物種も、在来のツルヨシやクズに加えアレチウリやシナダレスズメガヤなどの外来種も目立つようになり、新たな脅威要素といえる。

【特記事項】 日本直翅類学会編（2016）により、従来の *T. infernalis*（Saussure）とは別種とされ、表記の学名へと変更された。原名亜種は北海道に産し、模式産地は北海道札幌市及び中国東北部。両亜種間では体長や産卵器長などに相違が見られるが、野沢登（1967）によると新潟県直江津周辺の海岸の個体群は原名亜種と思われる特徴を有するとされ、両亜種の分布域には注意が必要である。生息地では時に同属のエンマコオロギ *T. emma* や他のコオロギ類と混棲が見られるが、競合関係にあると思われ、植生の発達に伴って本種が劣勢となる。
エンマコオロギとは、眉紋の大きさや鳴き声、メス産卵器の長さなどに相違があるが、オス交尾器の形状が明瞭に異なる。

科　名　コオロギ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オオオカメコオロギ**

〔学　名〕 *Loxoblemmus magnatus* Matsuura

指定状況　－

【形　態】 体長はオス 18 ～ 21mm、メス 18 ～ 19mm。産卵器端まで 28 ～ 29mm。オカメコオロギ類では大型。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 雑木林の林縁や畑作耕作地、果樹園、河川敷など多様な環境での生息が知られるが、何れも極めて局地的である。本種の生息条件は未だ解明されてはいない。

【県内での生息状況】 武蔵野台地の一角である新座市平林寺と所沢市・狭山市境のくぬぎ山周辺、比企丘陵に位置する滑川町の国営武蔵丘陵森林公園、秩父盆地内の秩父市上影森での記録がある。このうち平林寺では 1979 年、森林公園では 2000 年以降生息が確認されておらず、これらの個体群は消失したものと考えられる。新たな生息地は確認されていない。くぬぎ山周辺では比較的生息が安定しており樹林の管理状況などとの関連が考えられるが、生息のための条件は不明である。

【特記事項】 本種の危急度は改善されておらず、引き続き危機的状況である。

科　名　コオロギ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **コガタコオロギ**

〔学　名〕 *Velarifictorus ornatus* (Shiraki)

指定状況　－

【形　態】 体長は雌雄とも 15mm 程度。産卵器端まで 23mm。後翅は退化し痕跡的。前翅も短い。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島　北限は茨城県ひたちなか市沿岸部、内陸部では長野県中条村。

【主な生息環境】 乾燥したシバ草地や低茎草地で、草本のまばらな裸地に近い環境を好み、土中に穴を掘って潜んでいる。そのため穴を掘りやすいシルト質の均質な土質であることも必要である。幼虫越冬で、初夏には成虫が現れる。

【県内での生息状況】 これまでの記録は所沢市内の狭山丘陵と北本市、三芳町、小鹿野町など数ヶ所にとどまる。新たに東松山市と吉見町で生息地を見出したが、何れも極めて局地的である。本種は飛翔力の無い遺存的な種であり、かつ本県は分布の北限域に当たるため容易に絶滅し得ると思われる。

【特記事項】 本種の生息適地は各所に普遍的に見られるが、生息地は極めて少ないことから、新たに掲載種として加えたものである。

科　名　マツムシ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕**カヤコオロギ**

〔学　名〕*Euscyrtus japonicus* (Shiraki)

指定状況　－

【形　態】体長はオス8～10mm、メス9mm。産卵器端まで約18mm。体色は黄褐色で背面は濃色。翅は短い。

【国内分布】本州、四国、九州

【主な生息環境】雑木林の林床から乾燥した低茎草地にかけて生息する。チガヤ群落などに多く見られる。雌雄ともに短翅のものがほとんどだが、稀に長翅型が生じ灯火に飛来する。

【県内での生息状況】台地・丘陵帯の所沢市、狭山市、飯能市、旧神泉村（現神川町）から記録がある。飯能市宮沢では継続した生息が確認されているが、他の地点では近年の記録が無い。所沢市狭山湖では堤体改修工事による衰退が推定されるが、その他の減少理由は不明である。

【特記事項】生息地及び生息個体数の減少が顕著で、新たな生息地も見出せていない。本種は飛翔できず拡散能力が低いため、個体群が一度消失すると回復は難しい。

科　名　キリギリス科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕**カヤキリ**

〔学　名〕*Pseudorhynchus japonicus* Shiraki

指定状況　－

【形　態】体長は雌雄ともに63～67mm。日本本土産クサキリ類では最大。

【国内分布】本州（東北地方南部以南）、四国、九州

【主な生息環境】草丈の高いイネ科草地に生息する。

【県内での生息状況】これまで知られている確実な生息地は、本庄市の利根川河川敷と熊谷市の荒川河川敷のみであったが、何れの地でも2005年以降は生息が確認されていない。

【特記事項】中川・加須低地における減少が著しく、新たな生息地も得られていない。県内での生息が危惧される。

科　名　キリギリス科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　DD

〔和　名〕**イズササキリ**

〔学　名〕*Conocephalus halophilus* Ishikawa

指定状況　－

【形　態】翅端までの体長はオス約23mm、メス約26mm。産卵器末端まで31～35mm。

【国内分布】本州（東京湾周囲と伊豆半島）、四国（徳島県のみ）、奄美大島　日本固有種

【主な生息環境】おもに河口付近の感潮域のヨシ原やマングローブの低木林に生息する。

【県内での生息状況】生息地は汽水域に面する水際のヨシ草地に限定されており、県内での生息範囲は極めて限定されている。これまで八潮市の中川河川敷と、中川と江戸川を連絡している大場川沿いで生息が確認されているが個体数は非常に少ない。

【特記事項】本県が分布の北限に位置し、八潮市では次種カスミササキリと混棲している。両種の混棲地は埼玉県以外からは報告されていない。荒川下流域では東京都足立区から記録されている（国交省荒川下流河川事務所，2014）が、県内では生息地が確認されていない。

科　名　キリギリス科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **カスミササキリ**

〔学　名〕 *Orchelimum kasumigauraense* Inoue

指定状況　－

【形　態】 体長は短翅型でオス 20 ～ 23mm、メス 21 ～ 24mm。長翅型は翅端までオス 20 ～ 23mm、メス 21 ～ 24mm。

【国内分布】 本州（太平洋岸の北上川河口域から江戸川河口部、日本海側は新潟県南魚沼市） 日本固有種

【主な生息環境】 沼沢地や河川下流部のヨシ原に生息し、一部はその周辺の休耕地のヨシ原にも生息する。自然度の高い古くからのヨシ原に局所的に生息することから、遺存的な種類と考えられる。
Orchelimum 属の他種は全て北米大陸に生息し、本種と異なる点も多い。そのため別属とされる可能性があるが、その場合、近似種のいない日本固有の 1 属 1 種となる。

【県内での生息状況】 八潮市の中川河川敷と三郷市、吉川市、幸手市の江戸川河川敷で生息が確認されている。生息環境は河川沿いのヨシ草地に限定されているが、根際は必ずしも水没している必要は無く、水域から距離のあるやや乾燥したヨシ原からも見出される。生息密度は非常に低く、同一地点でまとまって発見されることはほとんどない。

【特記事項】 本県が分布の南限に位置し、八潮市では前種イズササキリと混生している。両種の混棲地は埼玉県以外からは報告されていない。

科　名　ササキリモドキ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ムサシセモンササキリモドキ**

〔学　名〕 *Nipponomeconema subpunctatum* (Motschoulsky)

指定状況　－

【形　態】 体長は雌雄ともに 11 ～ 15mm。翅端までは 13 ～ 17mm。

【国内分布】 本州、九州

【主な生息環境】 冷温帯落葉樹林に生息する。

【県内での生息状況】 山地帯に位置する秩父市大滝、中津川、三峰の数ヶ所から記録されているがいずれも 1 頭のみの記録で、個体数は非常に少ないと考えられる。低山帯からも記録があるがその生息状況は不明。

【特記事項】 以前用いられていた学名である *N. musashiense* では、大滝村（現秩父市）二瀬が模式産地の一つとされていた（YAMASAKI, 1983）。その後学名は変更されたが、和名の "ムサシ" は本県に因む。

科　名　ササキリモドキ科

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ムツセモンササキリモドキ**

〔学　名〕 *Nipponomeconema mutsuense* Yamasaki

指定状況　－

【形　態】 体長は雌雄ともに 11 ～ 16mm。翅端までは 13 ～ 19mm。

【国内分布】 本州、四国

【主な生息環境】 冷温帯落葉樹林に生息する。

【県内での生息状況】 秩父市大滝豆焼橋周辺と中津川流域（標高約 1,000m）の各 1 地点から記録があるのみ。豆焼橋周辺では継続した生息が確認されている。

【特記事項】 県内での本種の確認地点は前種ムサシセモンササキリモドキより西側に偏っており、両種の混棲地は未だ見出されていない。

科　名　クツワムシ科

〔和　名〕 **クツワムシ**

〔学　名〕 *Mecopoda niponensis* (de Haan)

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 翅端までの体長は 50 ～ 53mm。緑色型と褐色型が出現する。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 林縁部のやや開けた林床に主に生息し、中間層が密生した場所には生息がみられない。河川沿いの堤防などの草丈の高い草地にも生息する。

【県内での生息状況】 本種の生息地は多くが林縁環境であるが、中川・加須低地の渡良瀬遊水地周辺は樹林を伴わない高茎草地であり、特異的である。台地・丘陵帯では県南部を中心に生息地が点在しているが、何れも局地的。荒川以西では平林寺周辺、大宮台地では北本自然観察公園で継続して生息が確認され、上尾市からも報告された（長畑，2016）。低山帯での現地調査では生息は確認できなかった。
本種は暖地性の種類であり、福島県沿岸部まで記録はあるが本県を含む関東平野は分布の北限域に当たる。1960 年代頃までは平野部でも各地に生息していたが（星野，2016）、その後急速に減少した。

【特記事項】 減少要因には都市化による平地林の消失と、松くい虫やアメリカシロヒトリ等の駆除を目的とした都市近郊の殺虫剤散布の影響が考えられるが、明確な因果関係は不明。分布境界域であるため環境変化による影響は大きく、たとえ条件が好転しても勢力拡大までには至っていないと考えられる。生息情報が途絶えていた一部の市街地周辺部で、近年、記録が散見されるようになったが、人為的な放虫行為が懸念される。

科　名　バッタ科

〔和　名〕 **イナゴモドキ**

〔学　名〕 *Mecostethus parapleurus* (Hagenbach)

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 翅端までの体長はオス 25 ～ 27mm、メス 25 ～ 30mm。体色は黄緑色、黄褐色、褐色の三型がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州　　国外では旧北区全域に分布し、ヨーロッパとの共通種。

【主な生息環境】 山間部の湿地や水田、草原にすむが、西日本では局所的。関東周辺では山地草原に生息地が多く見られるが、以前は平野部のススキ草地に生息していた（内田，2005b）。平野部の個体群は現在ではほぼ見られなくなり、一定規模の草地環境の維持が必要とされる種である。

【県内での生息状況】 県内での生息は大規模な草地環境に限られている。皆野町と秩父市にまたがる蓑山で唯一安定した生息が確認されているが、その東側の尾根沿いの東秩父村坂本で新たな生息地が発見された。牧場及び牧草地が点在しているため発見地周辺の牧草地を詳細に調査したが、他の地点では同様の草地環境でも発見できていない。小鹿野町（旧両神村）の生息地は近年の調査では再確認されていない。本種の生息に適した草地環境も見出されず、当地の個体群は消失したものと思われる。山地帯での過去の記録は不確かなものであったことが判明し、新たな生息地も確認されていない。

【特記事項】 本種は近隣都県でも減少傾向にある。近県ランク　東京：CR、神奈川：NT、千葉：A（最重要保護生物）。

科　名　バッタ科

〔和　名〕 **カワラバッタ**

〔学　名〕 *Eusphingonotus japonicus* (Saussure)

埼玉県(2018)　EN　環境省(2015)　－

指定状況　－

【形　態】 翅端までの体長はオス 25 ～ 30mm、メス 40 ～ 43mm。体色は灰色、後翅は鮮青色で褐色帯がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州　　日本固有種

【主な生息環境】 中流域に氾濫原を残す河川にのみ分布し、礫質の裸地環境に生息する。堆積した礫は大きさが不揃いで、かつ適度な凹凸がある立体的な地表面であることが必要とされる。これは脱皮時の垂下姿勢のためであろう。また、産卵は砂地に為されるため、これらの複合的な環境が必要とされる。草本類が繁茂すると他種との競合により衰退するようである。
まれに河原から離れた採石場などでも生息がみられる。

【県内での生息状況】 前版で確認されたのは荒川、利根川からの数地点だが、神流川河川敷の上里町、神川町からも生息が確認された。神流川からは 50 数年ぶりの再発見となる。しかしいずれの流域においても個体数が少なく、ツルヨシ等の繁茂により礫地の減少が進んでいるため良好な生息地とはいいがたい。同様の礫川原が形成されている入間川や吉田川・赤平川といった荒川の支流では生息が確認されなかった。

【特記事項】 いずれの流域においても礫地の減少による個体数の減少が著しい。礫地の減少は、ダム建設による流路の安定と攪拌頻度の低下により河川周辺環境の遷移が進んだためと推察される。

科　名　マツムシ科
〔和　名〕 **マツムシ**
〔学　名〕 *Xenogryllus marmoratus marmoratus* (de Haan)

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長はオス 21 ～ 22mm、メス 19 ～ 21mm。産卵器端まで 30 ～ 34mm。体色は淡褐色で脚が長い。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 やや乾燥した草地環境に生息する。そのため河川堤防上や溜池堤体などの管理された草原に多く見られる。オギ、ススキなどのイネ科多年草が必要であり、外来種の侵入などによる草地の種構成の変化により衰退する。

【県内での生息状況】 以前は平野部に広範囲に生息していたが、現在ではごく限定された地点に残存している状況である。県南部では新座周辺や狭山湖周辺に生息していたが、これらの個体群は消失した。比企丘陵の溜池周辺も著しく減少し、安定生息地は荒川・利根川河川敷などに限られている。

【特記事項】 台地・丘陵帯荒川以西で特に生息環境の著しい悪化が見られる。

科　名　マツムシ科
〔和　名〕 **コガタカンタン**
〔学　名〕 *Oecanthus similator* Ichikawa

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長はオス 12 ～ 13mm、メス約 14mm。産卵器端まで 21mm。体色は淡緑色で腹面は黒くならない。

【国内分布】 本州、四国、九州　国外からは知られていない。

【主な生息環境】 山地樹林の林縁部に生息し、キイチゴ類との関連が強い。特にクサイチゴを好む。キリの葉やシダ植物に執着することも知られているが、食草としているかは不明。オス成虫はカラムシやクズなどの幅広の葉を持つ植物を発音時に利用する。

【県内での生息状況】 本種は 1995 年に飯能市刈生で発見され、その後低山帯である外秩父山地や上武山地の各地で生息が確認された。一部で台地・丘陵帯や山地帯まで分布域が及んでいる。何れの生息地も林縁部のキイチゴ群落で局地的である。低山帯でも個体数の減少が見られる。

【特記事項】 前版では近隣各県での生息が知られていなかったため LP としたが、その後の調査で群馬県、山梨県、東京都など各地に分布する状況が判明した（和田ほか，2009）。一方、県内の生息状況は局地的で脆弱と言える。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **メスアカフキバッタ**
〔学　名〕 *Parapodisma tenryuensis* Kobayashi

埼玉県(2018)　VU　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　　態】 体長はオス 21 ～ 26mm、メス 26 ～ 33mm。翅は退化し短い。体色などにより二型が知られる。

【国内分布】 本州（関東地方～中部地方）　本州固有種

【主な生息環境】 広葉樹林の林縁に生息する。

【県内での生息状況】 県内に生息する個体群はセアカ型に該当する。次種タンザワフキバッタに似るが前翅や尾肢の形状により区別される。生息域は荒川流域の秩父湖周辺から上流部に限定されており、次種との混棲地は見つかっていない。秩父市大滝の川又や入川支流の小赤沢では 2010 年の記録があるがその他の地域では 2000 年以降の確実な記録が無い。亜高山帯では雁峠（1,780m）からの 1 例があるが他に報告が無く詳細は不明である。

【特記事項】 富士川以東の甲府盆地周辺から埼玉県西部にかけてはセアカ型が分布し、メスアカ型とはオス尾肢の形状が異なる。メスアカ型が太く短いのに対し、セアカ型は尾毛先端が幅広く平圧される。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **タンザワフキバッタ**
〔学　名〕 *Parapodisma tanzawaensis* Tominaga et Wada

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長はオス 21 ～ 23mm、メス 26 ～ 29mm。翅は退化し短い。

【国内分布】 本州（千葉県南部、群馬県南部～静岡県東部、伊豆半島） 本州固有種

【主な生息環境】 広葉樹林の林縁に生息する。

【県内での生息状況】 本種は主に低山帯に広く分布しているが、ヤマトフキバッタ、ヒメフキバッタ、アオフキバッタに比べて生息範囲が狭く、個体数も少ない。台地・丘陵帯には分布せず、山地帯の記録も非常に少ない。

【特記事項】 本種はメスアカフキバッタ *P. tenryuensis* のシノニムとされた（日本直翅類学会編，2016）が、埼玉県においては両種が生息しており、外部形態で明確に区別でき、その差は連続していないことを確認している。また、タンザワフキバッタをメスアカフキバッタのシノニムにするという考えについては現時点では評価が定まっていないことから、本書では別種として扱う。メスアカフキバッタとは、前翅がより細く側生し、オス尾肢の先端が細くなることで区別できる。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **セグロイナゴ**
〔学　名〕 *Shirakiacris shirakii* (Bolivar)

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長はオス約 35mm、メス 26 ～ 40mm。前胸背は濃褐色。前翅に濃色斑を散布し、後翅は透明。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 荒地に近い乾燥した低茎草地から、被覆度の高い密生した湿性草地まで多様な草地環境に生息しているが、その多くは局地的である。そのため、環境選択性や拡散能力は低く、適応能力が高い種類といえる。食草であるイネ科草本類の有無が条件となる。

【県内での生息状況】 県北部では利根川河川敷などに広範囲に生息しているが、荒川中流域では局地的になる。県南部では、荒川以西の新座市周辺の生息地は消失し、川越市的場の入間川河川敷のみに生息する。県内の生息環境は河川敷の低茎草地に限定されている。

【特記事項】 河川敷などでは植生の発達により増加傾向も見られるが、外来植物の繁茂によるイネ科植生の減衰も見られるため、今後注視が必要。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **ツマグロバッタ**
〔学　名〕 *Stethophyma magister* (Rehn)

埼玉県(2018) VU　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 翅端までの体長はオス 33 ～ 42mm、メス 45 ～ 49mm。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 丈の高い草が茂る、湿ったところに多い。主に湿地周辺や河川流域などのヨシ群落やオギ草地に生息するが、時にススキ草地のような乾燥地にも生息が見られる。

【県内での生息状況】 低地帯から低山帯にわずかな記録があるのみ。中川・加須低地では既産地の三郷市での再発見ができず同地の個体群は消滅したと思われるが、新たに羽生市から加須市にかけての水田脇で生息が確認された。大宮台地では旧浦和市（現さいたま市）の秋ヶ瀬で 1980 年に採集された標本が確認されたが、それ以降の記録は無い。荒川以西では従来未記録であったが、新たに東松山市、川越市、川島町での荒川支流河川敷で発見された。低山帯台地・丘陵帯ではまだ複数地点において生息を確認できたが、生息範囲は非常に限定されている。

【特記事項】 湿性高茎草地の消失等による減少が著しい。また、谷戸環境や水田周囲などで圃場整備による乾燥化による影響も受けている。

科　名　コオロギ科
〔和　名〕 **クマコオロギ**
〔学　名〕 *Mitius minor* (Shiraki)

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長は雌雄とも 12mm 程度。体色は黒くて光沢がある。脚は橙色。
【国内分布】 本州、四国、九州
【主な生息環境】 湿地周囲など常に湿潤な草地環境に生息する。
【県内での生息状況】 低地帯から台地・丘陵帯にかけて生息し、湿地周辺や休耕田などの湿潤な環境で見られる。低山帯に位置する秩父市上影森でも生息が確認された。中川・加須低地などでは広範囲に生息していたものが、耕作地の乾燥化などにより局地的となっている。
【特記事項】 県内の生息状況は特に孤立状態ではないことが判明したが、全体的に湿地環境の減少が見られる。

科　名　キリギリス科
〔和　名〕 **ヒガシキリギリス**
〔学　名〕 *Gampsocleis mikado* (Burr)

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 翅端までの体長はオス 26 ～ 42mm、メス 25 ～ 40mm。緑色型と褐色型が出現する。
【国内分布】 本州（西限は岡山県） 日本固有種
【主な生息環境】 畑のわきや河川敷の明るい草原のやや深い草むらに生息する。
【県内での生息状況】 低地帯から低山帯にかけて広く分布しているが、中川・加須低地と大宮台地では極めて限定的に生息し、荒川以西、台地・丘陵帯では河川沿い堤防上の草地に帯状に生息している状況である。
【特記事項】 生息情報が途絶えていた一部の市街地周辺部で、近年、記録が散見されるようになった。人為的な放虫行為が懸念される。

科　名　キリギリス科
〔和　名〕 **ヒメクサキリ**
〔学　名〕 *Ruspolia dubia* (Redtenbacher)

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 翅端までの体長はオス 32 ～ 42mm、メス 42 ～ 48mm。体色は緑色か褐色。前翅翅端が尖る。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 イネ科植物の多い草原から林縁にかけて生息する。西日本では山地性。
【県内での生息状況】 大宮台地から山地帯にかけて生息するが、大宮台地と台地・丘陵帯では林縁のアズマネザサ群落に生息環境が限定されているため局地的となる。荒川以西では記録が無く、低山帯・山地帯での生息状況は良好。
【特記事項】 県内の生息状況は特に孤立状態ではないことが判明したが、台地・丘陵帯、大宮台地での減少が著しい。

科　名　ササキリモドキ科
〔和　名〕 **ササキリモドキ**
〔学　名〕 *Kuzicus suzukii* (Matsumura et Shiraki)

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長はオス 13 ～ 15mm、メス 11 ～ 13mm、産卵器端までは 19 ～ 22mm。
【国内分布】 本州、四国、九州
【主な生息環境】 低山の明るい林縁の低木や草地に生息する。夜行性でよく飛翔し、灯火にも飛来する。
【県内での生息状況】 主に台地・丘陵帯、低山帯の広葉樹林の林縁やクズ群落等に生息しているが減少傾向である。荒川以西では東松山市田木で 2003 年に、大宮台地では北本自然観察公園で 1999 年と 2009 年に確認している（未発表）が、他に記録が無く詳細は不明である。
【特記事項】 主要分布域の台地・丘陵帯、低山帯でも生息環境が減少しているため、掲載種とした。YAMASAKI（1982）により本種の所属が再検討された際に、日高市日和田山産の標本が用いられた。その後現在の属となり本種が模式種となっている。

科　名　ササキリモドキ科
〔和　名〕 **ヒメツユムシ**
〔学　名〕 *Leptoteratura* sp.

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長はオス 10 ～ 12mm、メス（尾肢基部まで）8 ～ 13mm。
【国内分布】 本州、四国、九州
【主な生息環境】 照葉樹林帯から冷温帯下部の樹林林縁やマント群落に生息する。
【県内での生息状況】 台地・丘陵帯低山帯の広葉樹林及びその林縁に生息しているが減少傾向である。大宮台地からは北本市から記録があるが他に記録は無く詳細は不明。夜行性でよく飛翔し、灯火にも飛来する。
【特記事項】 主要分布域の台地・丘陵帯、低山帯でも生息環境が減少しているため、掲載種とした。従来学名として *L. albicornis*（Motschoulsky）が用いられてきたが、これは別種を指すことが判明したため、種小名未確定となった。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **ヒメフキバッタ**
〔学　名〕 *Parapodisma etsukoana* Kobayashi

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長はオス 20 ～ 24mm、メス 25 ～ 37mm。翅は退化し短い。左右の翅は重ならない。
【国内分布】 本州（新潟県・栃木県～近畿地方北部）　本州固有種
【主な生息環境】 広葉樹林の林縁に生息する。北向き斜面などのやや日陰で湿潤な環境を好むが、単独分布域では明るい林縁部まで生息がみられる。
【県内での生息状況】 県央部の山地帯から台地・丘陵帯にかけての丘陵で広範囲に生息が見られるが、各地で個体数は多くなく生息地もやや局地的である。
【特記事項】 全体的に個体数の減少がみられる。北東限にあたる栃木県（2005）では要注目種。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **ハネナガイナゴ**
〔学　名〕 *Oxya japonica* (Thunberg)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 翅端までの体長はオス 17 ～ 34mm、メス 21 ～ 40mm。翅は長く、翅端に向かってやや幅広くなる。
【国内分布】 本州（北限は秋田県・岩手県南部）、四国、九州、南西諸島
【主な生息環境】 水田やその周辺などの湿性草地に生息する。
【県内での生息状況】 本種は古くは各地に広く分布していたものが 1960 年ごろを境に急速に減少した。近年になり各地で生息地及び生息個体数が増加している状況である。記録の乏しかった大宮台地からも深谷（2015）により生息が報告された。
【特記事項】 現在増加傾向にはあるが、その原因が特定されていないため長期的な推移は不明である。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **ナキイナゴ**
〔学　名〕 *Mongolotettix japonicus* (Bolivar)

埼玉県(2018)　NT1　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長はオス 19 ～ 22mm、メス 25 ～ 30mm。性差が大きい。翅は退化し短小だが稀に長翅形が出る。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 日当たりのよい乾燥した草地に生息し、ススキのような丈の高い草の群落を好む。本種は飛翔できず移動能力が乏しいため、一度個体群が消滅すると近隣の生息地からの再侵入による回復は期待できない。
【県内での生息状況】 台地・丘陵帯での生息地の減少が著しく、県南部の個体群は飯能市の一部を除き消失したものと思われる。荒川以西では唯一坂戸市内の高麗川河川敷に継続した生息地がある。低山帯では各地で生息適地の消失や縮小が見られる。
【特記事項】 県内の生息状況は特に孤立状態ではないことが判明した。亜高山帯と山地帯での生息状況は良好であるが、地帯区分の多くで生息環境への圧迫が見られる。生息地における過度の草刈りは圧迫要因となり得る。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **ヒナバッタ**
〔学　名〕 *Glyptobothrus maritimus maritimus* (Mistshenko)

埼玉県(2018) NT1　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 翅端までの体長はオス 17 ～ 23mm、メス 24 ～ 30mm。前翅前縁は広がらず後脚膝部は黒化しない。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 日当たりのよい草地に生息する。乾燥した裸地に近い低茎草地を好むが、より発達した草地でも生息しており、適応環境は幅広い。親は春季から出現し、年 2 化であろうと思われる。オスはよく発音する。
【県内での生息状況】 県内では県北部に偏った分布域を持ち、造成地や河川敷の乾燥した低茎草地で多く見られるが、南部で局地的。県央部から南東部にかけて、ほとんど生息が見られない空白域がある。近年各地で生息地の増加が見られるが注視が必要。
【特記事項】 地帯別の生息状況が明らかとなった。台地・丘陵帯での生息状況は良好である。

科　名　ササキリモドキ科
〔和　名〕 **クロスジコバネササキリモドキ**
〔学　名〕 *Cosmetura ficifolia* Yamasaki

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長はオス 12 ～ 15mm、メス（尾肢基部まで）11 ～ 13mm。翅は退化し短翅。
【国内分布】 本州（関東地方から近畿地方の太平洋側） 日本固有種
【主な生息環境】 照葉樹林帯上部の樹林に生息する。高木上や中間層の常緑樹上でよくみられるが生息密度は低い。夜行性であり、夜間樹上を活発に徘徊する。オスは翅による発音が為されるが、雌雄とも後脚跗節による踏み鳴らし（タッピング）音を発する。
【県内での生息状況】 低山帯の旧両神村（現小鹿野町）、秩父市、台地・丘陵帯の小川町、日高市、飯能市から 1 例ずつ報告されているに過ぎない。本県の位置する関東地方は分布の北限域に当たる。
【特記事項】 日高市日和田山産の標本が本種のパラタイプ標本に指定されている（YAMASAKI, 1983）。

科　名　ツユムシ科
〔和　名〕 **エゾツユムシ**
〔学　名〕 *Kuwayamaea sapporensis* Matsumura et Shiraki

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 体長は 16 ～ 33mm。メスの翅は短く、後翅は前翅とほぼ同じ長さで突出しない。
【国内分布】 北海道、本州、四国、九州
【主な生息環境】 多くは樹林性。低山地からブナ帯まで分布し、林縁部とそれに接する草本類の茂みに多く生息するが、河川敷などの高茎草地にも生息する。
【県内での生息状況】 生息域の中心は低山帯の林縁環境で、生息状況は安定している。中川・加須低地では樹林を伴わない河川敷のヨシ原に依存している個体群を確認しており、荒川河川敷でも同様の個体群が確認されている。両者の中間域である台地・丘陵帯では分布が局地的である。
【特記事項】 県内の生息状況は特に孤立状態ではないことが判明したが、地帯区分の多くで個体数の減少が見られる。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **ショウリョウバッタモドキ**
〔学　名〕 *Gonista bicolor* (de Haan)

埼玉県(2018) NT2　環境省(2015) －
指定状況 －

【形　態】 翅端までの体長はオス 27 ～ 35mm、メス 45 ～ 57mm。体色は淡緑色か褐色で、背面は淡紅色。
【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島
【主な生息環境】 イネ科草本の草原に生息するが特にチガヤ群落を好む。草本類に縦に止まり静止していることが多く、生態はイナゴ類やササキリ類に類似している。
造成地などの一時的に形成された草地環境で、短期的な発生ののち移動することが多い。
【県内での生息状況】 県内では台地・丘陵帯からの記録が比較的多い。狭山丘陵の一部などでは継続した発生が見られる。大宮台地の荒川河川敷などにも生息するが、局所的で連続的ではない。発生地では時に群生している。
【特記事項】 本種はイネ科草本に依存しており、草地植生がセイタカアワダチソウやアレチウリなどが優先すると個体群は消失する。

科　名　バッタ科
〔和　名〕 **クルマバッタ**
〔学　名〕 *Gastrimargus marmoratus* (Thunberg)

埼玉県(2018)　NT2　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 翅端までの体長はオス 35 ～ 45mm、メス 55 ～ 65mm。前胸背は弧状に隆起し、後翅に黒帯がある。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 草原に多い種で、都市部ではほとんど見られない。シバ主体の乾性低茎草地を好むが、樹林環境の付随を必要とするかなどの点で丘陵部と平野部で違いがあり、また *Gastrimargus* 属については山岳地に生息する性質を共通して持つとしている（内田, 2014）。

【県内での生息状況】 低地帯から低山帯での継続した生息が確認でき、今まで未記録であった荒川以西でも江南町、川島町、鳩山町、川越市の河川敷環境から記録された。

【特記事項】 主に低地帯各地で増加傾向が見られるが、なお生息地は局地的である。平野部での安定した生息が継続できるか注視する必要がある。

科　名　カマドウマ科
〔和　名〕 **クチキウマ**
〔学　名〕 *Anoplophilus acuticercus* Karny

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長は 12 ～ 19mm。光沢のある黒色で淡褐色の小紋を散布し、時に腹部背面に大型白斑を持つ。

【国内分布】 本州（関東山地から富士山）日本固有種

【主な生息環境】 ブナ帯の落葉広葉樹林に生息する。夜行性であり、昼間は立ち枯れなどの隙間に潜んでいることが多い。夜間に林床を徘徊し摂食する。

【県内での生息状況】 山地帯から亜高山帯に生息しており、秩父市大滝、秩父市中津川、秩父市三峰、小鹿野町河原沢からわずかな記録があるに過ぎない。

【特記事項】 生息環境は安定していると思われていたが、ニホンジカによる採食の影響により樹林内の植生減少、乾燥化の進行など、生息環境の悪化が急速に進行しているため、今回、新たに掲載種として加えたものである。具体的な生息情報は乏しい。

科　名　カマドウマ科
〔和　名〕 **ヒラタクチキウマ**
〔学　名〕 *Alpinanoplophilus longicercus* (Karny)

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長は 12 ～ 17mm。オスの前胸背板は平圧され、尾肢は長く発達し上方に曲がる。

【国内分布】 本州（埼玉県、長野県、山梨県、静岡県）日本固有種

【主な生息環境】 亜高山帯の針葉樹林に生息する。夜行性であり昼間は立ち枯れの樹皮下に潜んでいる。

【県内での生息状況】 県内における記録は非常に少なく、旧大滝村（現秩父市）の十文字峠（1984 年）と雲取山（1990 年）の記録があるのみである（内田 , 1995）。近年は確実な記録が無い。

【特記事項】 生息環境は安定していると思われていたが、ニホンジカによる採食の影響により樹林内の植生減少、乾燥化の進行など、生息環境の悪化が急速に進行しているため、今回、新たに掲載種として加えたものである。具体的な生息情報は乏しい。

科　名　キリギリス科
〔和　名〕 **ミヤマヒメギス**
〔学　名〕 *Eobiana nippomontana* Ishikawa et Wada

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－
指定状況　－

【形　態】 体長はオス 17 ～ 20mm、メス 20 ～ 29mm。

【国内分布】 本州（東北地方、関東地方、中部地方の内陸山地部）　日本固有種

【主な生息環境】 山地の林縁の草地に生息する。

【県内での生息状況】 亜高山帯の草原に生息しており、旧大滝村（現秩父市）の雁峠、将監峠、三国峠から記録がある。近年は確実な記録が無かったが、2016 年に三国峠で生息を確認した。

【特記事項】 生息環境は安定していると思われていたが、ニホンジカによる採食の影響により生息地の草地環境が減少しているため、今回、新たに掲載種として加えたものである。具体的な生息情報は乏しい。

科　名　キリギリス科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヒサゴクサキリ**

〔学　名〕 *Palaeoagraecia lutea* (Matsumura et Shiraki)

指定状況　－

【形　　態】 翅端までの体長は雌雄ともに 41 ～ 52mm。産卵器長 18 ～ 22mm。顔面に特異な紋様がある。

【国内分布】 本州（太平洋側は茨城県以南）、四国、九州　　日本固有種

【主な生息環境】 メダケなどのタケササ類のやぶに生息し、伸張した新芽を食害する。大きな河川や海岸に近い地域で見つかることが多い。

【県内での生息状況】 本県では 2007 年に北本自然観察公園で初めて発見され、以降、当地では継続して生息が確認されている。2014 年には川島町でも発見された。いずれもメダケと同属のアズマネザサへの食性転換がみられる。荒川流域には同様の環境が点在するため自然分布とみられる。

【特記事項】 継続的な生息調査において生息範囲の詳細やその増減などが未だ明らかではないため、今回、新たに掲載種として加えたものである。
茨城県つくば市からも報告された（中原, 2016）が、自然分布によるものかどうかは不明。

科　名　ツユムシ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヘリグロツユムシ**

〔学　名〕 *Psyrana japonica* (Shiraki)

指定状況　－

【形　　態】 体長は 24 ～ 31mm、翅端までは 38 ～ 56mm。体色は緑色で前胸背板後縁に黒帯がある。

【国内分布】 本州、四国、九州　　日本固有種

【主な生息環境】 山地性。広葉樹上に生息する。

【県内での生息状況】 低山帯以上の樹林に生息している。低山帯に位置する外秩父山地では、既知の顔振峠（飯能市、越生町）に加え越生町龍ヶ谷、東秩父村皆谷などで生息を確認したが、いずれも個体数は少ない。山地帯からの追加記録は無く、本種は低山帯を中心に低密度で生息していると推察される。

【特記事項】 低山帯、山地帯には広範囲に樹林環境が存在するが記録は少ない。またその多くで台地・丘陵帯まで樹林が連続し、類似の環境と思われるが生息状況は不明である。

科　名　バッタ科

埼玉県(2018)　DD　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **タカネヒナバッタ**

〔学　名〕 *Chorthippus intermedius* (Bey-Bienko)

指定状況　－

【形　　態】 体長はオス約 16mm、メス 18 ～ 21mm。中～長翅。オスでは後翅が発達する。

【国内分布】 本州（岐阜県、静岡県以北～福島県）

【主な生息環境】 主にブナ帯の山地草原やスキー場などの林縁部に生息する。近縁の亜高山性ヒナバッタ類よりも低標高帯に分布している。夏から秋にかけて成虫が出現し、よく飛翔する。

【県内での生息状況】 本県では主に亜高山帯の尾根部草原に生息し、雁峠、将監峠、三国峠と中津川キャンプ場（標高 800m）から記録がある。2001 年以降は確実な記録が無い。三国峠で 2016 年に実施した調査では生息が確認できなかった。

【特記事項】 生息環境は安定していると思われていたが、ニホンジカによる採食の影響により生息地の草地環境が減少しているため、今回、新たに掲載種として加えたものである。具体的な生息情報は乏しい。

科　名　キリギリス科

埼玉県(2018)　LP　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヤマヤブキリ**

〔学　名〕 *Tettigonia yama* Furukawa

指定状況　－

【形　態】 翅端までの体長はオス 33 ～ 40mm、メス 40 ～ 45mm。前翅は幅広く先端へ向けて狭まる。

【国内分布】 本州（東北地方南部～中部地方、近畿・中国地方）

【主な生息環境】 草地から潅木帯。地中に産卵するため幼虫期は地表付近の草本上にいるが、成虫は発音のためにより上部空間へと移動する。近縁のヤブキリ *T. orientalis* よりも上昇行動は弱く、木本を伴わない草原で生息が見られる。両種間では垂直方向で棲み分けている（野沢，1967）。

【県内での生息状況】 秩父盆地西部の尾田蒔丘陵から吉田丘陵にかけての草地に生息する。近隣では群馬県北部や栃木県北部、山梨県西部などに分布しているが、いずれの地とも連続しておらず、本県産個体群は隔離分布の状況となっている。

【特記事項】 広範囲に分布する近縁種のヤブキリとは鳴き声が明確に異なる。ヤブキリでは鳴き声が一定時間連続する「長鳴き」だが、本種では発音と無音がほぼ同じ間隔で繰り返される「切り鳴き」となる。形態では翅の形やオス交接器、メス生殖下板の形状などで区別できる。
生息地周辺では両種が同所的に生息するが、中間的な個体は生じておらず生殖隔離された別種であることは明らかである。

科　名　マツムシ科

埼玉県(2018)　RT　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **スズムシ**

〔学　名〕 *Meloimorpha japonica* (de Haan)

指定状況　－

【形　態】 体長はオス約 16mm、メス約 19mm。産卵器端まで約 31mm。体は黒色で斑紋はなく、触覚は白い。

【国内分布】 北海道（国内移入）、本州、四国、九州

【主な生息環境】 下層植生の発達した林縁部からやや湿潤な高茎草地にかけて生息する。上部が鬱閉された藪の下層空間に潜んでいることが多い。そのためオオブタクサやセイタカアワダチソウなどの外来種の占有草地でも生息が見られる。

【県内での生息状況】 低地帯から低山帯にかけて広く生息しているが、県南部及び、東部では局地的となる。大宮台地では開発による生息環境の減少が目立つ。所沢・狭山市境のくぬぎ山地区には少数生息するが、狭山丘陵では生息が見られない。

【特記事項】 県内の生息状況は特に孤立状態ではないことが判明した。低山帯、台地・丘陵帯では生息状況は良好であるが低地帯での個体数減少が見られる。飼育個体の逸出や放虫にも留意が必要である。

科　名　ヒバリモドキ科

埼玉県(2018)　RT　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **エゾスズ**

〔学　名〕 *Pteronemobius yezoensis* (Shiraki)

指定状況　－

【形　態】 体長はオス 5 ～ 9mm、メス 6 ～ 9mm。産卵器長は 3 ～ 4mm。体は黒く前翅屈曲部に白色縦帯がある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 低地帯から山地帯にかけての湿性草地に生息する。常時湿潤である環境が必要とされ、山間部では林縁部などにも普遍的に生息するが、平野部や台地上では湿地周辺などに限定される。地理的に体色などの変異が見られ、やや体色の薄い個体群が知られる。

【県内での生息状況】 県西部の山地帯から台地・丘陵帯にかけては生息状況は良好であるが、低地帯では東部へ行くに従い局地的となる。特に耕作地周辺では圃場整備による冬季の乾燥のため生息が困難になっている地点が多い、大宮台地では湧水量の低下などの影響を受けている。

【特記事項】 県内の生息状況は特に孤立状態ではないことが判明したが、低地帯での生息環境は悪化している。

科　名　キリギリス科

埼玉県(2018)　RT　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **オナガササキリ**

〔学　名〕 *Conocephalus exemptus* (Walker)

指定状況　－

【形　　態】 翅端までの体長はオス 20 ～ 26mm、メス 24 ～ 30mm。産卵器は際立って長く、翅端を越える。

【国内分布】 本州、四国、九州、南西諸島

【主な生息環境】 やや丈の高い明るい草地に生息する。おもに乾燥した草地で見られるが、時に水田内にも侵入する。

【県内での生息状況】 低地帯から低山帯にかけて分布するが、全体的に県北部に偏った分布域を持ち県南では少ない種である。台地・丘陵帯においては現在も安定して生息していると考えられるが、低地帯においては生息地が比較的限定され、近年の記録が無い。

【特記事項】 低山帯、台地・丘陵帯では良好な生息状況が保たれているが、低地帯では生息地が限られ個体数も少ない。なお本種の学名は従来の *C. gladiatus* から表記学名へと変更された（日本直翅類学会編 , 2016）。

科　名　バッタ科

埼玉県(2018)　RT　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **アオフキバッタ**

〔学　名〕 *Parapodisma takeii* (Takei)

指定状況　－

【形　　態】 体長はオス約 20mm、メス 23 ～ 26mm。翅が著しく退化していて痕跡的。

【国内分布】 本州（青森県～中部地方）

【主な生息環境】 低山地の広葉樹林林縁に生息する。フキバッタ類の中では特に明るい環境を好み、主に日当たりの良い灌木上や下草上に生息するが、多産地では時に草原や道沿いの草本上に群生する。

【県内での生息状況】 山地帯や低山帯では広範囲に分布し、台地・丘陵帯で局地的となる。県央部や南部の平地林ではこれまで生息は確認されていない。

【特記事項】 山地帯と低山帯では絶滅の危険度が少ないが、台地・丘陵帯では生息地が限られ個体数も少ない。なお本種の学名は従来の *Aopodisma subaptera* から表記学名へと変更された（日本直翅類学会編 , 2016）。

科　名　バッタ科

埼玉県(2018)　RT　環境省(2015)　－

〔和　名〕 **ヤマトフキバッタ**

〔学　名〕 *Parapodisma setouchiensis* Inoue

指定状況　－

【形　　態】 体長はオス 22 ～ 28mm、メス 27 ～ 38mm。翅は退化し短い。

【国内分布】 本州、四国、九州　伊豆諸島　　日本固有種で、いくつかの形質で地理的な型が認められる。

【主な生息環境】 丘陵地からブナ帯にかけての林縁部に広く生息する。明るい林縁の低木上にすみ、他のフキバッタ種より陽地性。

【県内での生息状況】 本種は樹林環境に生息し山地帯と低山帯では安定した生息が継続している。本種の生息域は平地林まで及んでおり、所沢市北部から狭山市、川越市のくぬぎ山地区や狭山丘陵では本種のみが生息し、他のフキバッタ類はみられない。

【特記事項】 山地帯、低山帯では絶滅の危険度が少ないが、台地・丘陵帯では生息地が限られ個体数も少ない。くぬぎ山地区では他所では見られない黒化型が見られる（和田 , 2006a）。